

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**  
**大学院生研究**  
**2010年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	日本文学	専攻		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科日本文学専攻博士後期課程1年		高松 亮太 印				
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名				
	文学部 教授		加藤 定彦 印				
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題名</b>	上田秋成文芸と秋成を中心とした和学者の研究						
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科日本文学専攻博士後期課程1年		高松亮太				
<b>研究期間</b>	平成 2 2		年度				
<b>研究経費</b>	2 0 0		千円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

『雨月物語』や『春雨物語』の著者として知られる秋成だが、彼の和学活動や周辺人物との交流については、未だ明らかにされていないことが多く残されている。近時申請者は秋成の講義記録を門人が書入れた『万葉集』を紹介し、秋成と門人の交流の一齣を明らかにした。しかし、周辺にはまだ多くの和学者がおり、彼等と秋成の交流、和学者同士の交流の解明など残された課題は多い。

そこで、和学者たちの交流の様相を明らかにすることによって、従来看過されてきた上方和学壇の新たな一面を明らかにする足掛かりとすることを目指した。特に、林鮎主や山地介寿ら秋成と直接交流があった人物たちについて、その和学活動と交流について調査を行った。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 上田秋成 ] [ 林鮎主 ] [ 山地介寿 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

従来、近世中期から後期にかけての上方和学者については十分な検討がなされていない憾みがあった。上方和学者や文人たちについては当の近世期より研究が行われており、膨大な蓄積が備わってはいるが、現在ではその事蹟を追うことが覚束ない人物も少なくない。その要因は彼らの旧蔵本・自筆本の散逸によって、現存が確認されている資料が極めて僅少であることに求められよう。活字などで容易に見ることができる資料からでは従来不明であった伝記的事実を明らかにすることが困難なことは言を俟たない。だが、それを逆手にとれば、未だ扱われていない新資料や未紹介資料によれば、従来看過されてきた和学者たちの動向や伝記を明らかにすることが可能になるはずである。そこで本研究では、和学の碩学たる宣長や秋成と上方の和学者たちがいかなる交流をもち、彼らの著述がどのような人物たちによって、どのように享受されてきたのかということについて、写本や奥書資料を用いながら検討を試みた。

本年度は、秋成周辺の和学者から2人の人物を取り上げてその事蹟についての調査を行った。まず、林鮎主について。鮎主には修士の頃から着手し、すでに彼が秋成の『万葉集』講義を聴聞しており、その記録を寛永版本に書入れているなど、寛政期を中心に秋成と和学をめぐる交流をもっていたことを明らかにしていたが、(拙稿「国文学研究資料館蔵『万葉集』秋成説書入考—林鮎主の講義聴聞をめぐる—」(『近世文藝』第92号、2010年7月)、本年度はその鮎主の和学活動と交流について、より広汎な調査を行い、彼の和学活動の一端を明らかにすることができた。概要を述べれば、本居宣長の著書出版や宣長から和歌の添削を受けるなど、宣長門人としての活動をj確認してきた。一方秋成門人としての活動としては、秋成が京洛に転居した寛政5年6月以降、同7年2月以前に門人として認められ、古典の講義を受けていた可能性を指摘、また講義の聴聞のみならず、秋成の著述を書写し、それらを他の京洛和学者たちに喧伝するがごとき役割を担っていたことを明らかにした。また、真淵の紀行『西帰』をめぐる秋成や橋本経亮との関わり、経亮の歿後彼の蒐集書を書写に努めていた可能性についても言及した。また、宣長とならぶ伊勢の和学者である荒木田久老の京洛における『万葉集』(巻4)をめぐる活動の一面と鮎主らによる講義聴聞について、久老の『万葉考榧乃落葉』(巻4注釈)の執筆と鮎主らへの講義との関連性を指摘。さらに、宣長や秋成、久老らが歿した後に京洛に創設された学問所鐸舎関係者と鮎主との交流についても言及した。そして、京洛和学壇の志向する学問が復古主義の思想面でなく、歌文の方面であったという伊東多三郎の見解を参照しつつ、鮎主の既述の活動を踏まえ、鮎主が宣長や秋成、久老ら求めたところも、歌文創作を目的とする手段であったと思われる旨を指摘した。以上の内容は本年度まとめたものであるが、未刊行であり、翌年度の刊行を目指している。

次に、いま一人の山地介寿について。介寿が寛政5年4月2日、上洛中の宣長に入門した京洛における鈴門の先駆であることは知られていたが、夙に松山白洋による紹介は備わるものの、京洛における具体的な活動や、秋成との交流などについては殆ど知られるところがなかった。かような現状を鑑み、本稿では論者の管見に入った資料に拠りつつ、介寿の文筆活動と交友関係についての整理を行った。松山によると、介寿は伏見藩邸に留守居役として勤務していた京都在留時代に、上田秋成や伴蒿蹊、また肥後の長瀬真幸など、多くの和学者、文人たちと交流を持っている人物であり、看過し難い。関係する資料は伝存未詳のものが多く、限定的な整理にならざるを得なかったが、従来顧みられなかった介寿の事蹟に再び光を当てることにより、近世中後期における和学壇の動静を究明する一助とすることができたと思う。以下、概要について述べると、まず松山論文や『高知県人名事典』(高知新聞社、一九九九年)によりつつ略伝を記したうえで、伝記上の補足事項や問題点について検討を行った。それにより、「介寿」の訓が従来「すけかず」「すけとし」「すけひさ」などと呼ばれていたものを、友人である今村楽の書簡によって「すけかず」であることを確定させた。その他、土佐文人たちとの交流や出生地、土佐への帰郷時期等について考察した。そのうえで、介寿と秋成の交流について、関西大学総合図書館蔵『歌聖伝』の奥書や天理大学附属天理図書館蔵『荷田子訓読斉明紀童謡存疑』の奥書などを用いつつ

**研究成果の概要 つづき**

明らかにした。また、介寿と同じ土佐人で、和学者であった鹿持雅澄には万葉研究書『万葉集古義』(以下、『古義』)が備わるが、その稿本である土佐山内家宝物資料館山内文庫本に秋成説が一例書き入れられている。その書入内容と符合する内容が、秋成の他の著述から見出すことができないことから、鴻巣隼雄が「秋成説が『古義』に導入されるについて、一旦山地介寿の手をわずらわしたであろうと想像させる」と述べる見解が首肯されるべきであるとの指摘を行い、介寿の『万葉集』講義聴聞の可能性について言及した。次に、肥後藩士にして宣長門人でもあった長瀬真幸との交流についても先の天理大学附属天理図書館蔵『荷田子訓読斉明紀童謡存疑』および、内藤記念くすり博物館大同薬室文庫蔵『西帰東帰』の奥書に依拠しつつ明らかにし、介寿の交遊圏の広がりについて実証した。加えて、立教大学図書館が近時購入した介寿自筆本7種を紹介することにより、京洛における介寿の書写活動の具体相を浮かび上がらせた。以上の介寿の活動と交流についての成果は、「山地介寿研究序説—上田秋成・長瀬真幸との交流を中心に—」(『立教大学日本文学』第105号、2010年12月)に発表した。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①
- ・高松亮太「国文学研究資料館蔵『万葉集』秋成説書入考—林鮒主の講義聴聞をめぐって—」(『近世文藝』第92号、2010年7月、1～14頁)
  - ・高松亮太「山地介寿研究序説—上田秋成・長瀬真幸との交流を中心に—」(『立教大学日本文学』第105号、2010年12月、113～122頁)。
  - ・「林鮒主の和学活動と交流」(仮、未刊行)
- ③
- ・日本近世文学会、平成23年6月12日、日本大学(予定、発表決定済)